

を以て、本興行をして一層盛大ならしめた。十月十日の目的地に競争に加入したるものは其數二十五の氣球と云ふ報告なるが、内六個は白耳義一は埃太利、一箇は佛蘭西、餘は悉く獨逸國民の氣球であつた。本競争の目的とする處は、即ち半時間の後、指定されたる地點に降陸するのである。此の降陸の地點は、地圖又は土地に目標を以て指定しあつて、出發の地點より百キロメートルを超過することか出來ないことにしてある。此の距離の算定は、當日の空氣の流動に省みて、即ち當日は至つて軟風なりしを以て百キロメートルの近距離を撰定したる譯である。

十月十二日の飛行連續の爲に加入したるものは總數三十八の氣球なりしか、本競争の目的は出來る丈長く空中に止まる

のである、本競争加入氣球の大ききは五百〇一乃至二千二百立方米突のものである。而して本競争は、氣球の大小に由て昇騰の順次を定め、大なるものを以て先とせり、第四の階級に屬するもの、即ち千二百一乃至千六百立方米突の氣球に屬するものに獨逸皇帝階下より一等賞を下賜せられたのである。此階級の昇騰の氣球は、二十二箇である。

十月十一日には、ゴルドン、ベンネツトの競争大飛行が催され、此日の加入氣球は、二十三とのことなるが、内亞米利加三、獨逸三、英吉利三、伊太利三、瑞西二、西班牙三である。以上の參加國の形勢に徴するに、是れ即ち萬國氣球の競争にして、實に壯觀と云ふべし。原則に由れば、何れの國も、此の協會に加入するものは、三箇の氣球と限つたのである。當時此の協會に加入せざり

しものは、僅かに墮太利と瑞典の二箇國にして是等は至て最近の大會の加入者である。本競争の目的は出来る限り長距離に飛行するのである。而して競争中には、中間降陸を許さざることとせり。故に通常飛行者は其眼的を常に空氣流動の最も速かなる處の高處を飛行せんければならぬのである。何となれば、風は概ね高きに昇るに従つて、いよ／＼増すものである。故に出来る限り、至て高い處を飛行するを以て利益とするのである。

ゴルドン、ペンネツト競争に就ての判決は、賞品の審判官に由て決定さる。此の審判官は、獨逸の氣球協會員より組織せられたのである。但し競争飛行に就ては、参加人たるアーベルクロン大尉に由て決せられ、尙規定に由り佛蘭西氣球俱樂部員の

一人が賞與審判官に參與し更に陪審官としては、柏林の樞密顧問官のブリスレイ、巴里のコムト、カスチルロン、デサント、ヴァクトル、伯林のヒルデブランド、豫備大尉、同メーデベク、豫備中尉及氣球製造所主のリーデンゲルの諸氏臨席せられたのである。今回の飛行競争の第一の勝利者は、瑞西のヘルヴェチア號乗組のメスネル大尉にして、同大尉は實に七十三時間の飛行を爲したのである。然るに一九〇七年のゴルドン、ペンネツトの第二の勝利者は、四十四時三分、一九〇六年の春に於いて、舉行されたるときはワグネル兄弟の五十二時三十分であった。

七十三時間空中飛行記

本篇は一九〇八年十月十日、十一日、十二日の三日間、伯林に催したる、ゴルドン、ベンネット萬國氣球船大競争の第二日目の最も長距離に飛行するものを以て優勝者と定めたる競争に参加したる十七氣球船の一にして七十三時間の記録大飛行を爲したる瑞西のヘレヴェチア號に乘組みたる同國氣球隊附メスネル中尉の實驗録を譯したるものとす。尙當日の競争狀況及各氣球船の降陸地などは本篇の寫眞に就て之を一覽せられたらば、白色人種の意氣及氣球界の大勢の一端を尙善く窺知することが出来ると思ふ。

數日間を費して、伯林に於けるゴルドン、ベンネット萬國氣球船競争に參加したるヘルヴェチア號はその餘りに用意充分なる爲めに友人又は多數の競争仲間より冷笑を以て迎えら

れたる位であつた。其上重くて長い索の用意を見た時は、周囲の一同は益々冷笑を極め、中にはヘレヴェチアの運命を危ぶみ、成べく餘計の物は省く様にと心附をして呉た人もあつた。間もなく午後四時となり、いよいよ出發指揮將校より一同出發と云ふ號令が響くと一同は堂々と高く飛揚を始めた。名残の國民の頌歌の聲が聞ゆる時は、已に群衆の頭上遙かに遠く飛揚し去て居つた。恰も此時余の右に當り、俄然爆發の響を聞いた。見れば米國のコンクエロル號が無慘にも破壊して風のまに／＼吹き散されて居る。哀れ不幸のコンクエロル號よ。汝が今日までの苦心計畫は水泡に歸したのである。實に余は之を人事と思ふ處でなく、さては其乗組の人の運命は如何など思ひ浮ぶにつれ、坐ろに無量の感慨を催して、今度は或は吾へ

レヴェチア號の番ではなにかとまで感じた位であつた。彼是
する中俄かに冷氣を催して來たので、ソロク、砂囊の配分に
取り掛り、ヤツト夜の十時に至り、此作業も片付たので、暫時休
息して、今飛揚して居る位置を調べて見ると、氣球は丁度百五
十米突の高度に昇つて居る。夜の十二時に至るまで、地圖にて
吾々の地位を定める爲めに、種々調査を爲して居る中に、夜は
次第々々に寂寥くなるばかり、遂に色々の想いの起るに任し
て、夜を明かした。取り分け、明日は何處にあるであらうかと、夫
のみ樂みにして幸福ある太陽の光を待つて居た。間もなく太
陽の登ると共に、濃霧四面を掠めて、最早咫尺も見分ることが
出來ぬ。からして、此時吾々は全く方向を見失ふた。十二時頃に
至り、太陽が千二百米突高く登つた時、漸と始めて、グロスザル

チエの町を認める事が出來た。そこで吾々は早速に其の方向
に進行し始めた。素より吾々の進行は至つて緩慢であつた。け
れども未だ吾々の後方の四ツの同僚の氣球船が飛揚して居
るのを認めた。而るに其の距離が餘り遙か後方で在た爲めに
其名を認めることが出來なかつたのは、何より残念であつた。
四時頃に太陽が傾くと共に、ソロク、瓦斯が凝結し始めた。そ
こで吾々は氣球を徐ろに降して、而して氣球に空氣を充分に
充填することに努めた。偕茲に最も喜ばしきことは、航空が既
に海上五百米突高く在つたことである。スツト下の方には未
だ風が強い様である。故に曳索を卸しつゝ、強風の速力に任し
て、約一時間にて、リユネブルゲルの森を横ぎつた。樹の鳴る音
木の頭か風の爲に屈む様などを高い處より觀て、誠に珍らし

く面白く感じた。七時頃に成た時は、吾々の位置は、百五十米突
の所にあつた。然るに風は以前よりも次第に強く成り、従つて
驚くべき速力にて飛行した。其中に日は暮れ、四面は最早暗黒
に成つた。けれども吾々は今チエルの附近にあること、丈は
確めることが出来た。只々吾々は前進する計で、取り分け丸で
魔術の様な速力にて、ウエゼル河を渡り、又同一の速力にて、ブ
レーメル、ハーフェンの南方の廣き支流に達し、それから間も
なく更に一ツの廣き遊散に適したる野原に來た。さて見渡す
に、此度は誠に吾々の降陸に適したる場所である。が、一行は中
々今此處で降陸する譯には參らぬのである。且つ吾々は未だ
充分の底荷(砂囊)を用意して居るし、又食糧品等の用意は八日
間の貯もある。如何に吾々は山にのみ住み馴れて、海には至つ

て縁遠き瑞西の鼠ではあるが、如何程波高き海でも決して懼
れない。まして國の爲めには、イザ鎌倉となれば命などは少し
も惜くない。寧ろ之は吾々の義務であると思ふて居るのであ
る。抑もまた何で吾々が此企を爲して居るか、と云ふことを充
分に意識したらば、運命のあらん限りは、前進して瑞西氣球隊
の面目を發揚せんければならぬのである。猶更出發の折に多
くの仲間などに冷笑された手前もあり、且友人の心切なる注
意の義理もあるからして、吾々は一層奮勵せんければならぬ。
茲で上陸などは思ひも寄らぬことである。月曜日の夜の十時
四十五分に丁度百二十米突の高度の下に、長蛇の海中に浮か
んで居る様な島を通過した。此島は恰も亦吾々の壯圖を歡迎
し、且つ降陸を招待するかの様に視ゆるのである。然し前にも

云ふ通り吾々の面目を又水の上にも代表せんければならぬ
と云ふ決心覺悟があるからして、矢張り此處も固辭して通過
した。そこでこれから吾々は愈々航空に耐ゆる丈の用意の
爲に仕事の段取を爲した。殊に吾々は絶えず監視の役目として
適當の時間内に交代を爲した。之は或る危急存亡の場合に全
力を注ぐ爲に、豫め餘力を養ふ爲である。又食事は成るべく平
素の如く規則正しく行ふことに注意して居つたので、丸で全
く避暑地の生活の心持で在た。吾々は此長き航空の間に、別に
之と云ふて身體に不快を感じたことはないのみならず寧ろ
常に元氣能く愉快に日夜を送つた位であつた。故に毫も心神
を悩ます様なことはなく、却て何卒して此の愉快なる生存を
今少しにても、永からしめんことを希望した位、感興を深ふし

たのである。夜間の仕事は、約り夜に成ると、瓦斯が凝結する凝
結すると、氣球が下るからして、此場合には絶えず曳索を水面
に垂れて其曳索の波上に遺す白き泡沫に由て精確に其方向
を定めるのである。然し如何なる場合にも吊籠を水面に觸
れない様に注意せねばならぬ。此關係に就ては吾々は既に瑞
西の湖上に於て充分に經驗を積み、修養して居るからして、至
つて巧者なものである。而るに夜中に於て、氣球の水面に落
つて巧者なものである。而るに夜中に於て、氣球の水面に落
ることを監察し又は氣球の跳ね上ることを防ぐことは、随分困
難の事である。けれども、若し如斯事故が起り又氣球が己むを
得ず平均の重量に於て、限りなき海を越へて飛行せざるべか
らざる場合と成つた時には、吾々は既に晝に於て、充分の看察
を成し置くことが出来るのである。然るに、此の永き夜の時間

には唯々海の擾々しき波の音が深刻なる寂寞の門戸を破り
來つて吾々を襲ふの外何物をも見ることも聞くことも出來
ない。けれども吾々は毫も不安の念を起した事はない。然し吾
々の想像はしばしば斯くまでも深く刺撃されてあつた。即ち
アレ彼處に燈が看ゆるのは船では無いか、イヤあれは土地で
ある。此の如きものがやつと見えたかと思ふと間もなく亦あ
らゆる物が消滅し、更に今度は他の形と成て現はれては又消
滅すると云ふ様な調子であつた。其中に亦今度は確かに事實
である。今度こそは吾々は決して欺かれて居るのではない。見
よ、アレは屹度燈である、など、叫んで見たが、是れまたいつし
か、夢か、幻の様に跡方もなく消へ失せるのである。然して余は
更に明瞭に犬の遠吠を聞いた。また寺の鐘の響も、また人の聲ま

でも、ありくと聞いた。儲は吾々は果して今は陸上に在るに
相違ない。如何にも人間の住んで居る土地に來て居るのであ
る。ヤレ喜しや論より證據其記號は今眼前に在ては無いか、實
に吾々は仕合せものである。今度こそは助つたに違ひ無い。見
よ、アレ吾々の下に陸が在ると叫ぶのもつかの間、また何時し
か、次第に沈黙となり、音づるものは依然逆浪の響のみである。
嗚呼、何たる事ぞ、またしても吾々は瞞着されたのである。いや
はや是れも又唯想像の晝に過ぎなかつたのである。此の如く
吾々は幾度か想像の熱に浮かされて晝は日光を看て雲上を
馳け、夜は霧と雲層を通して飛揚したけれども吾々は毫も勇
氣を坐折する事なく益突進するの元氣を起すのみであつた。
去れば今吾々の第一の急務は唯一の忍耐である。此上更に以

上の如き想像の形象の爲めに欺かるゝ事なくば吾々は必らず助かるに相違なく、また再び陸に来ることは受合である。之に於て吾々の砂囊は全く彼の砂金と均しく一瓦と雖も無用に消費する事が出来ぬのである。そこで后日砂囊の使用の目的にて古き包装品、食料品の函瓶などを袋の中に纏めて索を以て籠に丈夫に結び付け、先づ大體の處段々と籠の中の整理も就いた時は、恰も吾々の航空も最早是限りと云ふ様に見へたのである。されば如何程の微塵も、また籠の底に溢れて居る一粒の砂も、拾い集め、また航空中充分に温めて呉れた藁も共に空袋の中に入れた。然しかくまで苦心して取り纏めた程に僅かの物か、今日と成つては吾々の爲めに一生一代の忠實な

友人として貴重さるゝのである。さて右の様に随分種々の仕事があつたからと云ふて、毫も疲れると云ふことはなく、又一分間たりとも、航空中に怠ると云ふ氣も起らず、寧ろ此の永き航空をよし、今日まで成し遂げたと云ふ事に就て、非常に愉快を感じ、尙此後も長き無事の航空を保ち得ることをのみ樂みとして居つた次第である。然るに、儲吾々をして次の問題を解決すべき場合に迫らしめたのは、即ち假令最後の一瓦の底荷か使用し盡されたとするも、將た又危難が切迫するとも或は不幸にして海中の藻屑と成り終るにもせよ、其時期に望んで如何に吾々が處決せねばならぬかと云ふのであつた。既に火曜日の正午に至り、吾々は丈夫なる索梯を氣球の輪に取り付け、夫から丈夫なる索にて其處に籠網を結付けた。此の網は吾

吾二人が至つて便利に取り上げる事が出来るのである。機械は注意深く上の方に置き直され、目醒時計は丈夫に縛り付けられ、また吾々の二日間の食糧品と水とは砂袋の中に入れて、輪に結付けて用意をしたのである。儲此の如く凡て準備が出来たときは、誠に愉快なものである。左れば吾々は尙永き時籠の中に安全に暮す事が出来ることを樂みにして只々仕合よき陸を渴仰しつゝ、航空を續けたのである。また斧と鋸はイザ危難切迫の際に籠を切つて底荷として用ふる爲め用意して居る。既に如此用意を以て居ればこそ、吾々は勇み喜んで前進する事が出来るのである。又かくのごとく武裝したる上からは、最早好ましからぬ不意の出来ごとく切迫する事が出来ぬのである。否、なほ恐るゝに足らないのである。余は出發の當

日より水泳の胴衣を着用した。是は一は温度の爲めに、最も卓越なるものであるからである。四日目の朝に至り稍濕氣を感じて来た。之は恐らく今より少し寒氣を感じるに至るならんと思はれた。而し濫き日光は吾々を再び活かしめた。吾々の下には霧層の驚くべき壯觀にて横はりながら、太陽の日光の爲めに次第に消散して居る。而るに吾々は尙節降傘、航空者の用ふる傘形の具なりを用意して居る。此傘は空瓶又は他の重き物體を危険なく降陸せしむる目的にて陸上に使用すべき考へなりしも、今は之を用ふるの必要を認めないのである。何となれば此の際限なき海中に瓶を投ずるも恐らく之に出會するものがある筈がないからである。然し兎に角吾々は一二の通信を用意して、節降傘を卸した。彼れは意あるか無きか、徐ろに

吾々の無量の通信を携帯して天空を風のまに／＼飛揚し終
に吾々の眼より消え失せたのである。彼れ果して使命を完ふ
するや否や彼は何處にて降陸地を得るであらうか、彼れは知
らぬ他國の人より發見さるゝであらうか、それ共彼は涯り無
き海中に沈没するであらうか、願はくばヘレヴェチアの使命
をして健全ならしめよ。
余は未だ曾て片時も此の朝の出來事を忘れた事は無い。此日
は實に愉快なる天氣であつた。余は何時にも此の時の事を思い
起す毎に耐へ兼ねる程喜敷感するのである。其他當時の無量
の感慨も湧き出て、今尙轉た懷舊の情に耐へないのである。彼
是する中に圖らず九時頃に、二羽の鷗が吾々氣球の極く近く
を飛び行くのを見た。儲は大陸も愈程遠からぬ距離にあるべ

しと想像をした時の喜は實に言語にも盡されぬ位であつた。
實に出發以來曾て眼に止まらぬ生物が、今眼前に現はれて飛
び行くのを見ては、唯々未だ吾々の武連の拙なからざるを思
ひ、且つは必ず此の鷗は吾々の一行の爲に善き使命を齎らし
來たつたのであらうと、無限の感に打たれて覺へず、シエク少
佐と握手し、萬歳を祝したことである。
ところろで太陽が濃霧を破つて少し現はれては又隠れ、充分に
其姿を認める事が出來ない、而し聽ゆるものは相變らず波の
響と海風の音のみで、見渡す限り、雲烟濛々としてまた寸毫も
何れの姿も認むることが出來ない。けれども追々と雲間より
漏れて來る波浪の音も減ずるにつけ、水面が最早平穩なる内
海の影であることが別て來た。丁度十時頃に至り、第一着に陸

を認めることが出来た。如何にも吾々は長き航海の間に於て幾度か欺かれて懲りて居るが、今度に限りて、其様な事は有まじ之ぞ眞實の土地であらうと、漸く信用した段々と山嶺が現はれて来る、而も名も知れざる海、または人口稀薄の地方の狀態が見えて来る。後にヤツト吾々の故山に似たる立派なる山岳を以て飾られたるスカンヂナの海岸である筈と云ふ事丈を認むる事が出来た。此の福音に接したる吾々の喜びは如何、只々我々は無言にて顔見合はせたまゝ、握手するのみであつた。一言に之を盡せば、只無量の安心と愉快なる瞬間であつた、と云ふより外は無。陸よ陸よと叫びつゝ、唯夢の心地にて徐々に海岸指して飛行した。二時頃には丁度五千三百米突の高度に達して居た。故に成るべく其眺望を確める爲めに雲よ

り下に降りんと努め、やがて二千三百米突の處にて平均の地位を保ちつゝ、飛行せし時彼方に一艘の小蒸溜を認めた。そこで吾々は今如何なる地方に在るかを確認する爲め、之を呼んだ。やがて小蒸溜は方向を轉じて吾々に對して來た。吾々は氣球を海上八十米突まで降り、活潑なる風に送られて、曳索を軽く水中に垂れ、陸地近く飛行した。蒸溜船は全速力で漸く吾々と同行することが出来た。而るに船員一同より吾々に向て其始末を問はれた時に、吾々は之に對して何等の答を爲し得なかつた。船員は曳索を握り、吾々の拒絶するにも係はらず、船に繋留し、全力を以て僅か十乃至十五キロメートル距つ處の港に進行し、一時間半より二時間にて早や既にエルホルメンの港に着した。籠の不幸なる向け方に由り、水面に觸るゝまでに降

下した。そこでシエク少佐は既に用意されたる小短艇に便乗して海岸に至り、余は尙船と共に充分の速力にて進行した。余は此時始めて恙なくも八十米突高き陸上に到着する事が出来た。之に於て余が氣球の破綻瓣を開き瓦斯を抜き去りたる時は、丁度午後五時であつた。左れば出發以來七十三時間の航空であつたのである。四方より群集したる人々に助けられて、あらゆる荷造は完結したが、儲余は今電報を打たねばならぬのである。然るに是れがまた中々容易な事でない。と云ふものは電信局に到るには、約二時間を要するクリスチヤンズント云ふ處に行かねばならぬ。不幸にして吾々は誠に愉快なる喜ばしき時間をエルスホルメンのスコットハイム教師の家族の家に於て送つた。其中に余が此の實驗録を認め終つた時

は恰も夜の十一時で、夫より余は始めて寢に就いた。余は此の夜床に就きながら、愉快の儘に幾度か底荷に就て平均を取る事やら何かと繰返し、考たのである。翌朝早く伯林よりの返電到着したのを見て始めて世間にて吾々の無事の降陸を知り且つ吾々の友人及家族が吾々の幸福なる上陸を物語り居ることを想像して更に歡喜云ふべからざる愉快を感じた。さて全體の航海の間に、吾々は毫も何等の不足を感じなかつた。余は尙二十四時は航空に耐ゆるの用意があつた。唯吾々が深く同情に耐へざる者は伯林より出發したる氣球船の中にて尙二箇の氣球が其安否未だ分らぬと云ふことである。

飛 行 船 見 り 地 界

人間が鳥に均しく天空を飛揚せんことを希望せしことは、恰も人類が此世に生れて以來幾千年を経過して居る如く、随分古い事である。そこで先人間の好奇心として、どうかして自分の住んで居る地界の有様を地球の平面より即ち天空より見たい者である、何とかして之を展望する工夫はないものか、色々と考へたけれども、此希望は遺憾ながら永い間出来なかつた、又少とも大なる危険を冒さねば此の目的を達する事が出来ぬ、即ち氣球にて天空を飛揚する様なもので、至つて危険である。依つて先づ差し當り大なり小なり高い山から眺望する事にして辛抱もし、亦満足もせんければならぬ事になつた。故に十九世紀の中央に至るまでの登山の主なる動機は、殆んど此希望より生れたものである。然るに十九世紀に至り始めて地

方的眺望は常に一ヶ所に限られて在り、到底都會其他の著名なる場所の周圍までも展望する事が出来ないこと、即ち元來展望の山は從來曾て連山の最高の頂上で無いと云ふ事に氣が附いたのである。素より如斯同一の關係は亦氣球船の航空の場合にもある。左れば若し氣球船より假令は東京と横濱と同時に展望する事が出来、又東京の全市中を足下に見る事が出来たならば、勿論是非常の愉快に違ひないけれども、畢竟此の如き展望は至て極く高い處よりするからして、其形象は恰も地圖の様に見ゆるのみである。されば此の展望を以て奇麗である、と云ふ事は到底出来ない。故に世人多くは、地上僅かの距離に於て飛行することを以て例として居る。然るに飛行船が百米突乃至二百米突の高さに於て、田舎に来る時は、鷺鳥

や鶏か、鳴くやら、叫ぶやら、羽を打鳴して池から逃げるやら、犬か吠へるやら、牛はモー〜と啼くやら、夫は〜一時は丸で大騒動である。唯人間ばかりは何でコンナに騒擾しいのやら、まだ一向に空中の出来事の爲で有事には気が付かない。ヤツト数分間も経過し、気球は早や既に村の中央を飛行し居る時、始めて子供が飛行船が来た〜と叫ぶのを聞いて、全村擧て戸外に出て大騒ぎをする。と云ふ始末である。村學校では教師が鐘を鳴らすと生徒か吾先きにと馳けて學校の庭に集る。遂に人々は此驚きよりして、漸く蘇生して、致る處で此處へ御出で、此處へ御出と呼ぶ聲がして居る。さて靜かに成つたと思ふ時は、氣球は早や既に遠く村を離れて居る。只頑是なき小供が虹の出した所を探しに行く様に、氣球が隣村にでも降ると思ふて、

連りと追ひ馳けて來る。然し氣の毒には吾々は唯僅かの砂囊を捨て、今は三百米突の高さに於て、だん〜と原野又は森林を越て飛行するばかりである。モ一此時は氣球はソ一大きくは見え無いけれども、下の田や島で耕して居る百姓たちは是を認めて居る。又二三の兎は空中の黄色の妖怪に驚いて逃げる。牡鹿は非常な猛鳥に出會したと思ふて、氣遣しげにウロ〜として避難場所を探して居る。鶴は一生懸命に氣球船の前を逃げ廻つて居るなど、氣球船の下は依然恐怖の世界である。所で吾々の前途には寺院の高塔又は製造所の煙筒を持って居る大なる町があるから、是れよりまだ〜高く昇らなければならぬ。やがて鈍き鐘の響機關の汽笛が聽ゆる。最早今の高さにては街道の個々の物體は見分る事は出来ぬけれども、街

道又は地面を有て居る町の設計圖は明かに吾々の下に散在して居る事か分る。多數の橋を持つて居る河は或は寺院或は大製造所或は鐵道驛或は瓦斯局などより出來て居る市街を貫流して居る。諸吾々か次第に高く昇るに伴れ段々地方の個々の物體を見分る事か出來なく成る。從て人間動物の區別は元より家屋とても既に軒くんと分離して見分る事はとても出來ない。即ち世界の形象が次第に地圖と同一の眺望となるばかりである。今は唯汽笛の音回轉機の響か間歇に吾々の耳に入るのみで、最早地界の人馬の騒動などは毫も聽くことは出來ぬ。さなきだに吾々は今は三千米突の靜穩なる天國に入つて居るから、全く別世界の人間である。其の中に氣球船が飛行せぬ様にも見え、又下界は町村、湖、河、鐵道、國道、森、島などから

出來て居る一つの地圖でも見る様なものである。さて、航空者にして、一度地上に在る構造物は云ふまでもなく、更にアルペン山の如き、即ち自然の最も偉大なる建築物を越て飛行する時は、尙更一層の快感を覺ゆるに達しない。素より登山者が非常に心身を勞して辛うじて山嶺に達したる時の心地は、又實に何とも例へがたなき、忘れ難き愉快を覺ゆるに相違ない。けれども寸毫も物質の働きを要せず、又其身體を勞することもなく、天空を飛揚する航空者の身に在りては、尙更一層其の精神上の愉快を感じることは云ふまでもなきことである。最も氣球船は數分間にて、至て容易に航空者を高きに昇らしむることが出来るけれども、登山者は數時間を費して、辛うじて攀上る事が出来るのである。實に航空者は今はアル

ベンの天嶮の爲に毫も苦勞せずと、自分の脚の下に高山を瞰
 めて充分の愉快を得る事か出来る。されば若し氣球船が山嶺
 の間を飛行する折などは、其形象は實に千態萬狀にて絶えず新
 陳代謝して吾々の旅行を慰さむるのみならず、牧舎を持たる
 青々たる牧場又は平和に飼ふ牛の群か吾々の前に浮動する。
 又山の小川より流れる潺々たる狭き谿谷を渡り、又は寂寞た
 る岩を越へ又は其岩の背には群羊が曾て見たこともない黄
 色の妖怪の前に驚き石の如く成て居る状態などを見つゝ、飛
 行する心持などは到底も筆に盡されぬ。
 既に此の如く氣球からアルペン山の驚くべき絶景を観察す
 ることが出来るにも拘はらず、之を信用して居る人は未だ僅
 かである。けれども、今日既に走行にてアルペン山の天嶮を冒

すことを敢て苦にせざる登山者は随分多い様である。果して
 然であれば最早氣球にてアルペン山上を飛揚する位のこと
 は別に畏るゝにも及ばないことであると思ふ。

是で氣球に關する現代世界の大勢は略ぼ述べ盡したと思ふ。不肖余が此の著作に對する勞力は是で先づ一
 段落を告げた。が、願ひて余が事業——と云ふのも餘り大袈裟だが——の跡を眺むれば、是れ徒らに外人研
 究の餘端を傳へたに過ぎない。地に落ちた氣球の影を追ふて走つたに過ぎない。余が氣球に對する眞面目な
 る勞力は實に之れからでなければならぬ。
 前年チエツペリン伯が第一回飛行試験に失敗して氣球船更造の必要已む無きに至れるや、愛國心に富み、
 研究心の熾なる全獨逸人は、立所に貳百萬馬克餘を義捐して此の國家的否世界的發明家を扶けた。而かも大
 失敗に屈せざるチエツペリンの勇氣と云ひ、之を扶くる國民と謂ひ、他國の事ながら余は涙が零れる程深く
 感じた。爾て我が氣球界の現狀は奈何、山田氏は奈何、奈良原氏は奈何、日野氏及其他の發明諸氏は奈何。
 愛國心に於て將又研究心に於て寧ろ彼に劣けを取らぬ我が國に於て、振はざる此の現狀に満足せざる諸君
 の心が、聽て凝り固まつて、何等かの形式を以て遠からず世に現はれ出でむことは、著者の固く信じて疑は
 ざる所である。
 こんな意味の或るものが、形と爲つて現はれた時、軍用氣球研究会に對し、余は之れを特に
 日本氣球研究会
 と命名し、兩々相俟つて此の國家的發明の氣運を助成したい。助成して本書に現はれた程の一切の記録を見
 返つて遣りたい。否見返らなければ止まぬ決心である。

猶 存 識

最 近 世 界 の 飛 行 船 終

Luftfahrt „Z. II.“ über Offenburg am 31. VII. 1907
 von Herrn Theodor Böhm
 Es wurden mit der
 Goja
 ...

高き處より御挨拶申
 ます
 一千九百九年七月三十一日
 オフエンバッハ通過の
 チェツペリン第二號
 飛行船にて
 伯爵 エフ、チエツペリン
 コーリスマン

本書はチエツペリン伯爵が
 千九百九年七月獨逸のフ
 ンクフルト、アム、マインの
 飛行展覽會に出會の爲めオ
 フエンバッハを通過の際飛
 行船よりテ、ヘーム君に投
 與されたものである。チエ
 ツペリン伯爵名の側にコー
 リスマンとあるはチエツペ
 リン號建造會社の社長が共
 に記名したものである。

明治四十二年十一月廿五日印刷
 明治四十二年十一月廿八日發行

— 近世界の飛行船 —

（定 價 金 五 拾 錢）

著 者
 所 權
 有 作

著 者 大浦元三郎
 發行者 大橋新太郎

印刷者 笹川 欽藏

印刷所 出版印刷株式會社本所分工場

東京市日本橋區本町三丁目八番地
 東京市本所區番場町四番地

發 兌 元

東京市日本橋區本町三丁目
 振替貯金口座東京二四〇番

博 文 館

軍艦詳説

全一冊洋裝菊版總布特製
寫真版十頁挿入紙數五百廿六頁
正金壹圓廿錢小包拾貳錢

海軍工學士 宮原次郎 君藏 著
監修 海軍工學士 田增友

—(次 目)—

- 第一編 軍艦の類別
 - 第一章 軍艦の發達及び沿革の概要
 - 第二章 軍艦の任務
 - 第三章 軍艦の種類及び階級
 - 戰國艦 ○海防艦 ○巡洋艦 ○砲艦
 - 及び水雷砲艦 水雷驅逐艇 ○潛航水雷艇 ○水雷母艦 ○其他の諸艦
 - 第二編 軍艦の建造
 - 第一章 軍艦製造の材料
 - 第二章 造船所 ○造船部 ○造機部
 - 第三章 艦隊の構造
 - 第四章 船用機關
 - 汽機 ○汽罐 ○補助機關 ○速力と實馬力との關係
- 第五編 艦裝
 - 第六章 試運轉
 - 第一章 軍艦の防禦方法
 - 第二章 裝甲板
 - 第三章 砲煩 ○彈丸 ○火藥
 - 第四章 火藥 ○魚形水雷
 - 第四編 雜錄
 - 第一章 無線電信
 - 第二章 軍艦塗色
 - 第三章 水雷の效果
- 附錄
 - 帝國海軍艦艇表 ○世界七大海軍國軍艦艇比較表 ○内外度量衡比較表

發兌元

東京市日本橋區本町三丁目
振替貯金口座東京二四〇番

博文館

中等物理學講義

全一冊洋裝中版上製
紙數七百九十五頁
正金壹圓五拾錢
郵稅金拾貳錢

青葉理學士 葉理學士 共著

科學の書は多く硬澁にして而かも簡短なるが常なり中學生若くは獨學者は之が爲めに無用の齟齬を續り研究に苦しむこと少なからず殊に物理學化學の書に於て多く之を見る本書の記述は大に其點に注意し主として程度を卑近に取り平易明確に説明を努めたり且つ實地應用の力を養ふ爲めに理論の後に模範となるべき例題を附し其解法をも示し圖畫の多くは著者が自ら描きしものにして一見理論の研究に便なるため密畫投影畫を省きて断面圖となせり此等微細の注意を以て全篇を作成せしもの從來其例なきなり中學生及獨習生の爲めに最上無二の良講義書と云ふべし

普通物理學

全二冊洋裝菊版美本
紙數六百三十八頁
並製一冊金四拾錢 郵稅八錢
特製一冊金五拾五錢 小包八錢

福井政一 著

物理學は科學の主腦を制するものにして其知識は一部専門家の間に得らるるを以て足れりとせず、社會一般に通じて必須の學問なれば特に普通にして、高等なる學理を説明せる書籍の存在するは單に學問の爲めのみならず、人類生活の需用に値すること更に大なり、本書は故德田理學士の遺稿によりて更に福井理學士の訂正増補によりて之を統一し、博く普通物理學の新知識新材料を世の研究者に頒つ、説述懇到挿圖數百蓋し物理學書の精冊といふべし

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 振替貯金口座東京二四〇番 博文館

理學士 劉屋他人次郎君著
工學士 重見道之君著

新撰應用重學

現代文明の一方面は物質の運動作用を利用する工學上の效果に俾つこと益し多大なるべし、本書は劉屋理學士が其該博なる學識によりて研鑽せられたる著述にして收むる所を要言すれば重きを運動學に置き進んで靜力學及運動學に論及し、是れが應用を例示するに鎖索の作用を以てせり故に本書に於ける重學の理論の解説は直に其神髓を闡明し讀者をして容易に其應用を會得せしむるの特色あり實に著者が苦心の貢獻と云ふべし、世の斯學研究者は勿論工業に従事せる士の是非一讀せざるべからざる要書なり

全一冊洋裝菊判紙數三百五十二頁
並製金四拾錢
正價金五拾五錢
特製金五拾五錢
小包錢稅

應用機械學

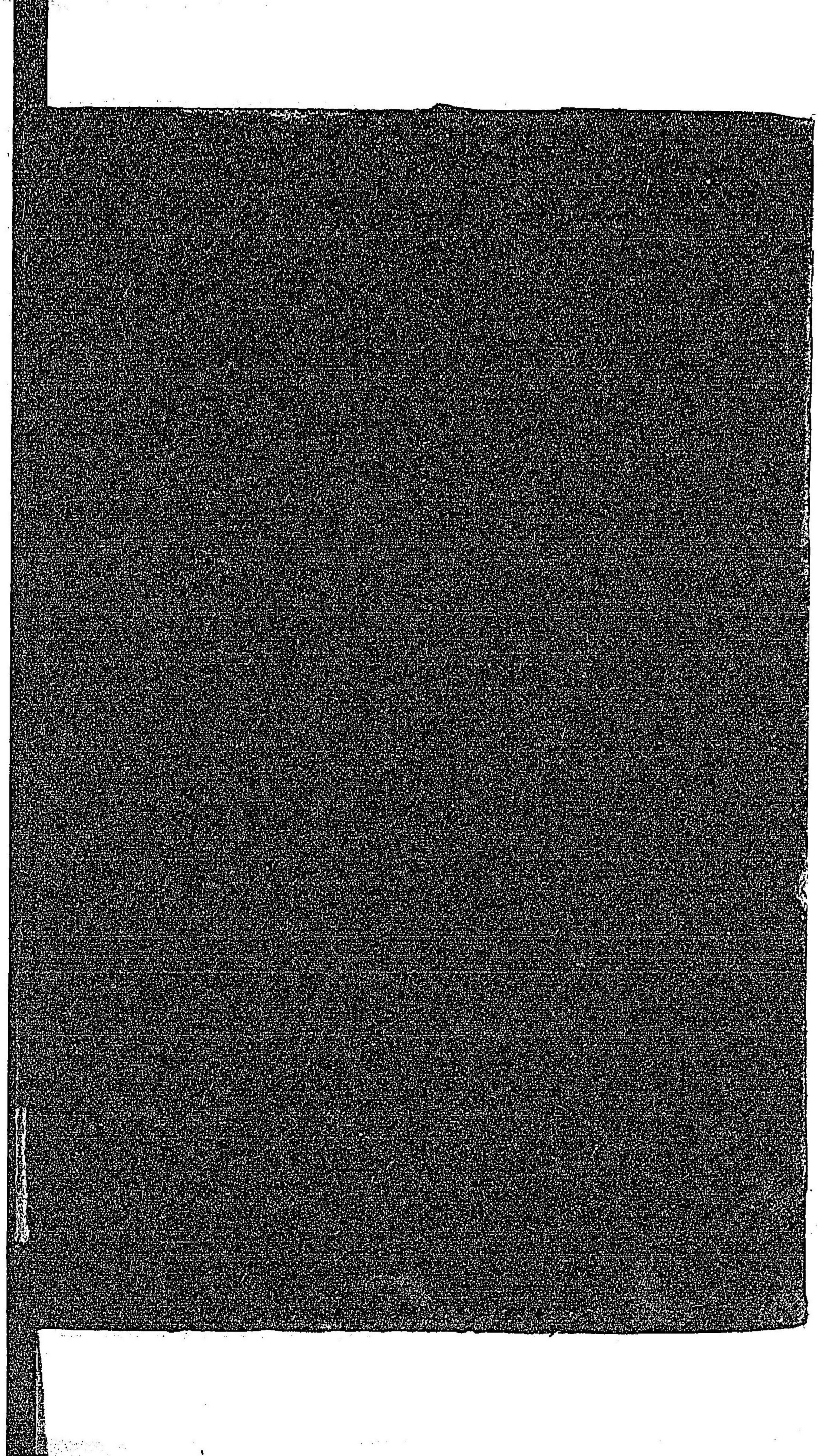
方今機械工學上に関する計算及設計上の著其類稀有にして斯學攻究者の失望少なからず著者茲に見るありて本書を著はす其範圍を工科大學機械科課目中の應用力學材料及び構造強弱學流體機械學等計算的理論及應用に採れり而して初學者の爲に數多の例題を附し之に詳解を與へて便利に供せり卷末に於ける機械の計算に必要な數の表又初學の格補なり

全一冊洋裝菊判紙數三百頁
並製金四拾錢
正價金五拾五錢
特製金五拾五錢
小包錢稅

發兌元 東京市金口座本區本町三丁目番十四 博文館

328

106



328

106

067111-000-5

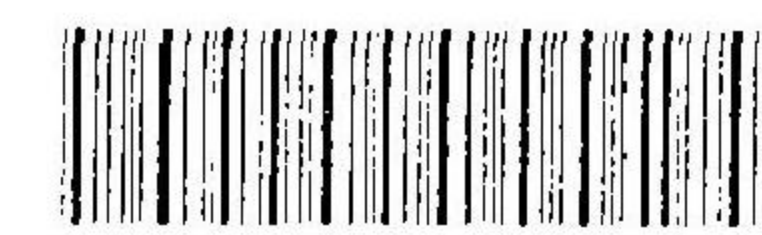
328-106

最近世界の飛行船

大浦 元三郎/編

M42.11

CDG-0240



3. 2. 23